

「大奥」の実態と終焉

増山雄三

江戸城における「大奥」という呼称は、第四代徳川家綱の時代から使われはじめ、それは將軍の正室や家族、それに仕える奥女中が暮らす、將軍の後宮の事を指すが、従来は、大奥に勤務した女中の、回顧談や聞き書きなどで語られる事が多く、閉ざされた特別な世界、というイメージが強いものだった。

江戸城内の曲輪は、本丸・二の丸・三の丸の本城と、西丸、紅葉山、吹上御殿、西丸下で構成されていたが、大奥が置かれたのは、本城内の三つの郭で、本丸は將軍夫妻、二の丸は將軍の生母や側室、そして三の丸には、世嗣夫妻や大御所夫妻が使用していた。

本丸御殿は、表と中奥それに大奥に区分され、この内、表と中奥は一続きの御殿だが、大奥は銅堀で仕切られ、中奥と大奥を繋ぐ唯

一の廊下は、御鈴廊下と呼ばれ、将軍の出入りのため、鈴を鳴らして合図を送った。それで、大奥の女主であり主宰者でもあったのが、将軍正室である「御台所」で、三代将軍家光以降は、近衛家・九条家・一条家・二条家・鷹司家の「五摂家」か、有栖川家・桂宮家・伏見宮家・閑院宮家の「四親王家」から迎えるのが、慣例になっていた。それでも、十一代家斉の広大院と、十三代家定の天璋院の二人は、どちらも薩摩藩出身だったが、近衛家の養女となった上で輿入れし、十四代将軍家茂の御台所の和宮親子内親王は、摂家・宮家出身でなく、皇女だった。御台所が主宰者だったとはいえ、三代家光の鷹司孝子は、夫とうまくいかず、正式に御台所と呼ばれぬまま、本丸から中丸に移されて、大奥の実権は専ら春日局が握っていたというが、こうした御台所不在の期間が、合わせて百年ほどあり、その間は、先代将軍の正室や将軍の生母らが、大奥を主宰していた。

それが近年、江戸城大奥を取締る「大奥法度」の分析で、將軍以外の男性が入れないと思われていた場所に、老中などの役人のほかに、医師や大工それに宗教者など、様々な鈍性が入りしていた事が分ってきた。

さらに、残された資料で研究が進められた結果、大奥に奉公した女中の手紙とか、大奥の人事を記録した「女中帳」から、庶民が奉公した実態や女中の職別や昇進、それに、俸禄の仕組みなどが明らかになった。

また大奥法度の一つである「奥方法度五か条」は、三代將軍家光時代の、一六一八年に制定され、大奥への男女の出入りを制限し、さらにその出入りを管理する「切手門」で、男も女も厳しく取締まられ、長櫃などの荷物も、同様にここで厳しくチェックされた。

それでもこの法度は、実は、大奥の出入りを管理する男性役人の、勤務規定として出されたもので、実態は、男人禁制といった内実を伴う、厳密なものではなかったという。

それは、儀礼や普請の際などで、重い荷物を運ぶ場合や力仕事などで、男が大奥の中に入ることは避けられなかったし、また奥医師は頻繁に大奥に出入りし、呉服商や蒔絵の職人なども、大奥の中に入って、女中からの注文受けのため出入りしていた。

それに、大奥の管理を職掌とした、老中や留守居年寄といった役人も、定期的に大奥を検分していたので、大奥は男と女の協業によって運営されていたとは言え、ただ、一人で行うことは許されず必ず複数で行動し、原則として、帯刀は許されなかった。

一方で、組織が形作られた頃の大奥は、女たち自らが男を排除して、自律的に運営していたという見方もあるが、しかし、一六七〇年、第四代家綱の世に、「女中法度」が定められると、儀礼担当の男性役人が、大奥に深く介入するようになり、女中の行動は、彼らに管理されるように変化していった。

それでも、このような表向きの男たちにと

って、面倒に思われたのは、旗本や御家人など武家出の女中たちが、直接、大奥で將軍へ願事する内証行為があったので、そんな事もあり、大奥内部の人事についても、表向き役人が、次第に深く介入するようになり、管理を強めていった。

それで、これまで大奥のトップにいた、上臈御年寄りと言われた老女に代わり、老中や留守居年寄がこれに当たり、後に、享保時代には職制としての整備が進み、これが制度的に完成していったため、大奥というのは、女だけの世界とみていると、その全体像を、見失ってしまうことになりそうだ。

とはいえ、幕藩政治史が専門で、大奥について職制や、幕政下での女性の位置などを研究してきた、学習院大学教授の松尾美恵子さんは、「これまで大奥の女性達は、男性に仕え、政治的なものには関わらないと見なされがちだったが、大奥という組織の中で、それぞれの役割を果していた」と語る。

それでも、まだ大きな議論ができる段階ではないと思うが、大奥に関して一つひとつ事実を明らかにしていく事で、外国や別の時代とも、比較できるようになるのではと、今後の研究に期待を寄せている。

ところで、江戸時代に作られた大奥の女性たちは、一体、どのような暮らしを送っていたのかという疑問を解くため、東京墨田区の江戸東京博物館で、「大江戸の華―武家の婚礼と商家の祭」という催しが開かれ、そこには、嫁入り道具や、女性専用の乗物など、大奥に伝わる華やかな意匠が凝らされた、多くの品々が展示されている。

中でも、第十三代将軍家定の生母である、本寿院所用と考えられる、「黒塗梅唐草丸に三階菱紋散蒔絵女乗物」は、内部まで美しく装飾され、当時の威容を伝え、また、「牡丹唐草葵浮線菊紋散蒔絵婚礼丁度」は、眉帯や道具包など、日常を彩ったという品々が展示され、かなり興味をそそられる。

それらについて、徳川林政史研究所長は、一般の人達が、大奥について一番知りたいのは生活面だが、当時の資料には、それらは余り書かれてないので、回顧談や聞き書きから推察するしかないというが、その生活実態を伝えてくれる、道具類や衣裳など遺愛の品々は、改めて注目されている。

その後、幕末期の大奥は、表の政治問題が波及するようになり、水戸藩前藩主の徳川斉昭が、琉球や蝦夷地の扱いについて、十二代将軍家慶に訴状を送り、また、安政期の将軍継承問題では、南紀派と一橋派が、大奥工作を巡って政争を繰り広げた。

慶応四年（一八六八年）、鳥羽伏見の戦いで、最後の将軍となった徳川慶喜は敗北したため、新政府が慶喜追討令を発した後に、幕府は、開闢して初めてといわれる、徳川家中に向けた「御触」を発令し、それによって、「大奥」は終焉したのである。

令和三年九月